
敦也物語

ごはんライス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

敦也物語

【コード】

N8879W

【作者名】

ごほんライズ

【あらすじ】

2000字設定で書きました。ちょっと意味不明なのであとで改稿するかもわかりません。

(前書き)

前書きとか言っちなよ。軽く生きろよ。

兄貴の敦也はゲームが好きだ。学校から帰ってくるとすぐにするし、休日は一日じゅう部屋にこもりゲームをする。桑田佳祐も好きだ。ゲームは本当に好きで好きで結婚してもいいと思ってた。

「兄ちゃん」

「今、ゲームしてるからあっち行って」

オレは、食卓で焼き蕎麦を食べた。お母さんがお代わりはと言った。

「うりゃ。うりゃ。うりゃあああああああ」

そんなわけで、敦也は大人になってゲーム会社に入社した。もはや、勤続二〇年の大ベテランだ。

そんな敦也も昨年他界した。交通事故でR。

敦也の娘、清子は、ある日、レイプされた。

それにより精神障害を起こし、自殺してしまった。清美は、生前、革命を起こしたかった。清美はパートをしていた。正社員と異なり、低賃金システムの犠牲になっていた。だから、高賃金革命を起こしたかった。

野麦峠の再来である。平成になって再来した。

「ほんと？」

「スパゲッティにしてよ」

清美には趣味が三つあった。ひとつだけ言うと、封筒を破るのが好きだった。

これには理由がある。

関わってる人物は三人。一人だけ言うと、新田明である。

明は、とある団体に所属していた。彼の趣味は釣りだ。

「明ちゃん。釣ったねえ」

「えへへへへ。えへへへへへへ」

太陽がきらきら照っていた。

オレは、すばる文学賞にも送る予定だが、電撃小説大賞にも送る予定である。

自分の実力がよくわからない。書く量はすごい。

おそらくプロよりたくさん書いている。

しかし、内容を見ると、どうしてもプロの方がいいように感じてしまう。

実際はオレの方がすごいのだが、無印税だとしてもそう感じざるをえない。

太陽がぎらぎら照っていた。

かえるが鳴いた。

狂いそうな日本の田園風景。

「松ちゃん。あれとって」

「やだ」

車はすごいスピードで走っていた。

だから、おばあさんをはねてしまった。

敦也のおばあさんである。つまり、オレのおばあさんでもあるわけだ。

雨が降る。すごい雨だ。いわゆるゲリラ豪雨である。

楽しいのか楽しくないのか、世の中は理不尽である。

「松ちゃん。あれとって」

「やだ」

こうして日々は過ぎる。

とある事務所。

「松ちゃん。あれとって」

「やだ」

その事務所も今はない。いろいろあって、倒産してしまった。

その事務所で働いていた大石光一は、ギターが好きだった。

たまに楽器店へ行く。

「松ちゃん。あれとって」

「やだ」

楽器を見ながら、ふと思う。オレはカネがないではないか、と。
そう光一はアルバイトなのである。アルバイトは、みなさんご存知の通り、低賃金システムの犠牲にあつてゐる。こんな世の中はもう終わりにしないといけぬ。経営者が贅沢をするために貧しい人を増やすシステムは早く早く破壊しないといけぬ。一刻も早く。

「松ちゃん。あれとつて」

「やだ」

ざああああああああああああああああ。

光一が家を出たとき、野良犬のジヨンに会つた。

「松ちゃん。あれとつて」

「やだ」

ジヨンは、松本が嫌いだった。松本もジヨンが嫌いだった。

「松ちゃん。あれとつて」

「やだ」

「とつて」

「やだ」

ざああああああああああああああああああ。

ざああああああああああああああああああ。雨は降る。怒りを込めて降る。雨宮は高校生だ。受験勉強に終わっていた。キレそうだった。勉強はつらいことである。何の意味もない。がんばってもがんばっても意味のない作業だ。むなしいことである。

しかし、雨宮は負けない。負けてたまるかという気分でがんばっていた。

しかし、昨年自殺してしまった。悲しいが、これが現実だ。

ざああああああああああああああああ。

てるてる坊主が悲しげな表情をしている。

真夜中に原付を飛ばす。

悲しいことである。悲しい日本経済の陰影。

オレたちはどこに行くんだろう。

オレたちはどこからきたんだろう。いまどこにいるんだろう。さっぱりわからない。

「マツチヨなおじさんがきたぞ。逃げるんだ」

「松ちゃん。あれとって」

「やだ」

きつい。本当にきつい労働だ。徹底した低賃金システムだ。システムはいつ改善されるというのか。えらそうな正社員どもを皆殺しにしたい。

こうして日々は過ぎる……悲しいことだ。悲しんでばかりもおれない。

吉田聡と項沼伝一は、会社を設立した。

その会社は昨年倒産した。ある事件がきっかけである。

その事件には、高田松太郎が大きく関わっていた。

松太郎は二二歳である。

その妹、ヨシコは、勝山病院で生まれた。

勝山病院の説明は省く。

ざああああああああああああああああ。

雨がなかなかやまない。

敦也は、電話をとった。

すぐに家を出た。

「松ちゃん。あれとって」

「やだ」

日本人のいやなところである。狂ってもいいだろうか。もう限界である。

太陽がきらきら照る。

この世代の悲しみである。

どこまでも闇、闇、闇。陰鬱なる日本の幻影。

影がゆらゆら揺れている。

このままだと、このままだと。

台所で爆発音がした。

「松ちゃん。あれとって」

「やだ」

「ごああああああああああああああああ。」

「ごああああああああああああああああああ。」

(後書き)

あとがきのことには気にするな。気にしてたら人生終わっちゃうぜ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8879w/>

敦也物語

2011年9月21日03時31分発行